

ネイチャー高知

No19 2001年7月30日発行

磯の生物観察会 報告

三本健二

2001年4月22日(日)、夜須町塩谷海岸。

干潮時刻(11時30分ごろ)をはさむ約2時間、磯の生物観察会を実施しました。参加者は、坂本さん(代表世話人)と説明係の私を含めて9人と少数でした。

観察テーマは、次の2つです。□ 潮間帯での生物のすみ分け、□ 潮間帯の動物の多様性。

潮間帯は、潮の満ち干によって、水中に沈んだり、空気中に出たりをくりかえす場所です。そこでは、位置

(高さ)によって、空気中に露出する時間がちがひ、露出に耐えられる時間などに応じて、生物のすみ分け

(帯状分布)が見られます。また、多くの分類群にわたるさまざまな動物がすんでいます。

観察会では、最初にそれらのテーマと、観察のときに注意する危険生物について説明しました。次に、浜に打ち上げられた貝殻やウニの殻などを拾って、それらから、あたりの海の生物について情報が得られることを紹介しました。その後、岩場での観察に移りました。

陸側の大きな岩では、ずいぶん高いところまで巻貝のアラレタマキビがいます。岩の下の方には小さいフジツボ(イワフジツボ)が付着し、そこから下がっていくと、だんだん貝類の種類が増え、水面下にはウニ、エビ、魚類、海藻などが見られます。帯状分布の一端がうかがえます。水面下ないし水面の少し上では、いろんな「

門」の動物が見られました。

最後に、この目見かけた動物をひろいあげてみます。

海綿動物門	イソカイメン類
刺胞動物門	イシサンゴ類、イソギンチャク類
扁形動物門	ウスヒラムシ?
外肛動物門	コケムシ類
軟体動物門	ヒザラガイ、マツバガイ、アマオブネガイ、アラレタマキビ、クジャクガイなど
環形動物門	ゴカイ類、ケヤリムシ類
節足動物門	イワフジツボ、カメノテ、カニ類、エビ類、ヤドカリ類、フナムシ
棘皮動物門	ナマコ類、ヒトデ類、ムラサキウニなど
半索動物門	イタボヤ類
脊椎動物門	魚類

身の回りの植物調査

坂本 彰

昨年秋から自宅の周りの植物調査を始めました。今年度から始まった「高知県植物誌」作成のための調査に、素人がどのくらい関われるかを確かめるために始めたものですが、結構面白く、今は完全に「はまった」状態になっています。

自宅があるのは、高知市朝倉の住宅地で、周辺には田んぼもありますが、どんどん宅地化が進行しています。南に行くと国道56号、いわゆる「土佐道路」があり、更に南に行くと神田川が西から東にながら、その南は「南嶺」と呼ばれる鷲尾山から烏帽子山、柏尾山と続く山並みの麓になり、規模は小さいですが照葉樹林もあります。また、土佐道路沿いには、あまり手入れされていない、結構広い空き地があるというように、植物の生育環境としては、川原や海岸がないもののいろいろな舞台が揃っています。

これらのうち、まずはごく近いところからということで、散歩している範囲（環境庁の3次メッシュの範囲（おおよそ1km四方））に生えている植物の標本を造り、それを調べることから始めたところですが、「はまっている」と同時に結構手こずっています。

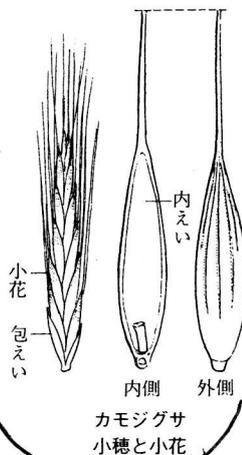
手こずっている原因としては、素人にとって図鑑の記載が分かりにくいことがあります。例えば道端でよく見かける「カモジグサ」と「アオカモジグサ」の違いは、平凡社の「日本の野生植物草本I」では、カモジグサは「苞穎は皮針形でとがり、護穎は内穎とほぼ同長、芒は乾いても外曲しない」のに対し、アオカモジグサは「苞穎は狭長楕円形、護穎は内穎よりも明らかに長く、芒は乾くと外曲する」と記載されています。これは、実際にカモジグサとアオカモジグサの違いを知っている人が読めば理解できますが、これから知りたいという素人にはよく分かりません。これが、次のように図と文章で表現されている（保育社検索野草図鑑③すすきの巻）と、よく分かるのですが……。

カモジグサ

イネ科

アグロピロンは「野のコムギ」の意のギリシャ語。

Agropyron tsukusiense (Honda) Ohwi var. *transiens* (Hackel) Ohwi アグロピロン ツクシエンセ(筑紫の) 変種 トラシエンズ(中間の)



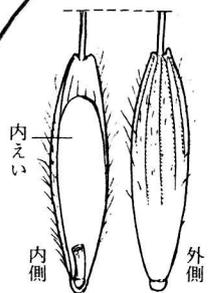
カモジグサ
小穂と小花

アオカモジグサ

イネ科

Agropyron ciliare (Trin.) Fr. var. *minus* (Miq.) Ohwi アグロピロン キリアレ(まばらに毛がある) 変種 ミヌス(より小さい)

草原や道ばたに多い多年草。カモジグサからはつぎの点で見わけられる。(1)穎(えい)は表面にまばらな毛がある。(2)小花の内穎は護穎より短くて先が細まらない。(3)小穂は淡緑色である。ただし、カモジグサにも淡緑色の型があるので、色だけで見わけはできない。(4)果時に入るとノギがつよく外側に曲がる性質がある。(5)カモジグサの花穂にくらべて垂れ方が少なく、ときにはほとんど直立する型(タチカモジグサという)さえある。以上のうち最も重要なのは(2)のちがいで、小花をひとつ取り出し、内側をルーペで見るとよくわかる。日本全土。花期は5～7月。



アオカモジグサ 小花

ただ、このような同定の決め手になる部分を詳しく書いてある本は、掲載されている種が少なく、全部が全部このように解説されているわけではありません。本当に図鑑というのは人に分かってもらうという努力が足りないと思つづく思います。

調査を始めて、図鑑がわかりにくい以上に一番困るのは、対象になる植物が無くなることです。畑や田の畦だと耕したり、草引きや草刈りで突然無くなってしまいます。植物を採集する側からは、こまめに手入れをする農家の方より、少々手抜きをして粗放的な管理をされている農家の方がありがたいですが、そのような農家は少ないようです。またある空地では、数年ほったらかしにしてあり、いろいろな荒地や草地に生える植物が見られ、「花が咲いたら標本に」と思っていたところ、重機が入ってほとんど無くなってしまったということも経験しました。

これよりひどいのは除草剤による消滅です。「あれっ」と思っていると、それまで生えていた草の葉が茶色く焼けて、涸れてしまいました。除草剤の散布による消滅は、刈り取ったのと違って、影響がしばらく残るのでよけい始末が悪いです。除草剤の威力はなんとすごいものと、あらためて驚かしています。

調査を初めてまだそれほどの期間が経ってないですが、ニューフェイスも見つかりました。山中二男先生の高知県の植生と植物相に載っていない、セトガヤモドキやナガミヒナゲシ、ツタバウンランなども見つかりましたが、当然いずれも外来植物です。外来植物の増加は本来生育している植物にとっては脅威ですが、調べる側からはニューフェイスが見つかるとうれしくなり、調査にも熱が入ります。

ところで、身近な場所で見ることのできる植物の数はいったいどのくらいあるのでしょうか？いわゆる里地というより人家周辺の植物の数は、例えば愛媛の人里野草図鑑では273種が掲載されていますし、行程の雑草という本では229種がとりあげられています。校庭の雑草では海岸の植物が対象になっていないなど条件が違いますがおおそ250種が普通の人家の周辺で見ることができる植物の数と考えられます。そうなると県内の自生種は約2,900種とされていますので、自生種の約1割近くが身の回りで見ることができるということになります。

250種ぐらいたと、記憶力が衰えた私でも覚えられるかなと思って挑戦していますが、皆さんも時間を作ってチャレンジされることを是非ともお勧めします。草花が身近な存在になりますし、自分がいかに身の回りの自然を知らなかったということがよく解ります。

自然観察会「ムササビウオッチング」のお知らせ

大きな樹木をねぐらとして生活するムササビの観察を通じて、森と動物の関係（ねぐらや移動手段、餌場としての森の必要性）を学びます。

観察場所の伊野町杉本神社は「伊野の大黒様」と親しまれている、町の中心街に近い神社ですがスギの大木が残りムササビのねぐらになっています。

講師の山崎さんが一昨年設置したムササビの巣箱も、ねぐらとして利用されているようです。

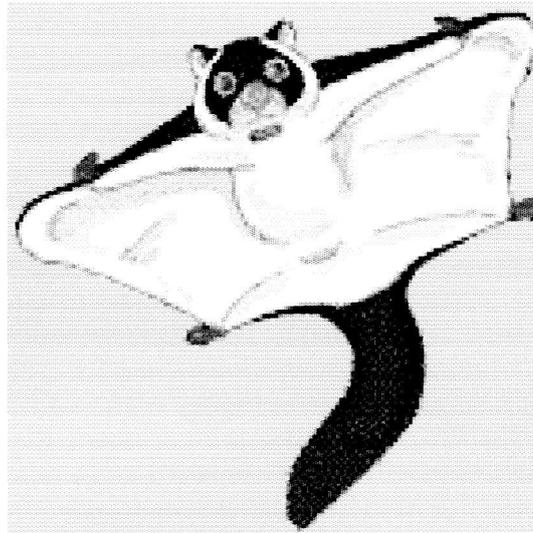
日時 2001年9月1日（土曜日）
午後6時から（雨天中止）

場所 伊野町杉本神社

持ち物 筆記用具 懐中電灯

講師 山崎三郎さん

参加申し込み
事務局坂本まで
(TEL&FAX 088-850-0102)



「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報
No19

事務局 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰方

TEL&FAX 088-850-0102

E-MAIL akira@baobab.or.jp